

創作能・万葉集より～番外編～

藤白坂について 令和6年4月 有田百代

『梅花万葉集友の会・春のお出かけ～和歌浦を訪ねる旅～』
万葉人憧れの地、和歌浦の春景色を堪能し、爽快な海風に吹かれ
すばらしい歌の世界にすっかり浸っていた私は、
最終目的地へのバスに乗り込み、大切なことを思い出します。

この旅、最終の目的地は、藤白神社。そして藤白坂。
謀反の罪に問われ、無念の死を遂げた『有間皇子』最期の地です。

※有間皇子事件・・・・・・・・・・

齊明4年（658）11月3日 天皇一行の牟婁湯行幸の留守中

蘇我赤兄が失政をあげて皇子に謀反をすすめる。

5日謀議を終えた夜半、赤兄は皇子を逮捕。9日牟婁に護送。

中大兄の訊問をうけ、帰途11日に藤白の坂に到って絞殺された。

（万葉集 全訳註 中西進著より）

バスを降りる頃には、それまでの浮かれた気分とは打って変わって
何とも後ろめたいような心持ちと重い足取りで坂を上がり、
皇子のお墓へと向かいました。

どうかどうか。何事ありませんように・・・。

ところがです。恐る恐る、足を踏み入れたその場所は、
思いがけず綺麗に掃除が行き届き、皇子のお墓には、
その悲劇の物語とは反対に、生き生きとした杜若と
可愛らしい菜の花が、丁寧にいけてありました。

住民の方によるものでしょうか。

悲劇の物語の主人公が眠っているはずのそこには、

恨みつらみの怨念など微塵も感じられず。

ただただ、静かに。穏やかに。

凜として落ち着いた有間皇子の魂を、感じることができました。

心を込めて、そっと手を合わせますと、
皇子の澄んだ声が聴こえた気がしました。

「誰かを、憎む恨むことなど、とうに終わっております。
ただただ私が若く、幼かっただけのこと。
権力争いに巻き込まれ、人を信じられず。
狂人のふりを続ける日々は終わったのです。
不安に心を持っていかれることもない。
心配ご無用。実に安心してここにおります。
けれども、他の者のことだけは頭を離れることがございませぬ。
私に仕えたがために、巻き込んでしまった。
それだけが申し訳なく、無念でなりませぬ。
そこの旅の方。どうか手を貸してはもらえませぬか。」

皇子らしい聡明な言葉に、心が動かされます。
そうだったのですね。ならば、その念晴らせますよう
微力ながらも、作品づくりでお手伝いをさせていただきます。
ただ、この悲劇の物語に救いは見出せるのでしょうか。

「天と赤兄が真実を知っていることでしょう。
私は何も存じません」

中大兄より直接の詰問を受けても、
言い訳など無用とする達観した潔い言葉に、
誇り高き有間皇子のすべてが込められていました。

皇子の意図を汲み、重苦しく悲しい記憶にしないためにも
この物語には清く、明るく、健やかで、軽やかな方たちに
助けていただく必要がありました。
その象徴のような、稀有な存在のお二方にご登場いただくこと。

桜舞い散る藤白坂の帰り道、お二人並んだ背中を眺めながら
まるで、家持と憶良みたいだなあ。
などと考え歩いていたら、思いついてしまいました。
お許しただけでしたら幸いです。

創作能・万葉集より～番外編～

藤白坂

万葉集友の会。年に二回の、お出かけ勉強会の下見のために和歌浦、藤白坂を訪れたふたり。

案内人の先生らしき方の名を、仮に家持氏と呼ばせていただき年上の方の名を、仮に憶良氏と呼ばせていただきます。

(あくまでも架空の団体・架空の人物のお話しということで・・・)

有間皇子の墓を参り、手を合わせたのちに藤白坂を上るふたり。

家持氏 「さあ、そろそろ戻りましょうか。憶良さん。
なんだか辺りも薄暗くなってきました。
住宅街も離れてちょっと嫌な気分がしてきました。」

憶良氏 「いえいえ、何をおっしゃる家持先生。
せっかくここまで来たのですから。
もう少し、もう少し。歩みを進めましょう。」

家持氏 「いえいえ、憶良さん。
私は先ほどから、妙な胸騒ぎを覚えます。
道を迷ううちに、時空まで彷徨ってしまいそう。
何もないうちに。ささ。戻りましょう。」

憶良氏 「何も起こりませんよ、家持先生。
もうすこし。あとすこしだけ・・・」

先ほどまでの春の陽気と打って変わって
周囲は急に秋の気配。木枯らしが枯葉を舞い散らせる。

その奥から、妙に薄い陰の人々が列をなして
歩いてくる。顔色暗く、この世のものではない
気配がする。

家持氏「あああああ、、、ほら。もう限界です。
戻りましょう。
目を合わせてはいけませんよ、憶良さん。」

(木枯らしにぶるると震え、憶良氏に耳打ちする家持氏。)

憶良氏「それ。そこのご一行様。どちらに行かれるのですか。」

家持氏「話しかけてはいけません。憶良さん！」

憶良氏「道に迷われていませんか。よければこの私たちが
ご一緒しましょうか」

一行 「旅の方か。私たちは、今どこを歩いているのか、
皆目見当がつかぬのです。この地の名はなんと。」

憶良氏「こちらは藤白の坂にございますぞ」

(いつのまにやら。すっかりその気の憶良氏。)

一行 「なんと藤白坂。ではここは、和歌浦か」

憶良氏「そなたたち、名はなんと申される？」

一行のひとり

「私の名は守君大石、こちらは坂合部連薬氏でございます。
我々は、ある方を探しておるのです。」

家持氏「・・・・・・・・！なんと、まあ！これは現実か。」

(驚愕する家持氏。)

憶良氏「家持先生。どうかされましたか？」

家持氏「いえ。知らない方がよいこともあります。憶良さん」

～～～家持氏・憶良氏が出会ってしまった一行の正体は

齊明四年・658年

蘇我赤兄に唆され、有間皇子と共に謀反を計画したとされる
守君大石・坂合部連薬と従人たちの、彷徨う亡霊であった。

有間皇子は謀反の罪により、藤白坂にて死を賜り

守君大石・坂合部連薬はそれぞれに配流の刑となった～～～

一瞬で全てを察した家持氏。意を決して、一行に声をかける。

家持氏「よいですか。みなさま。

時は現代、あなた方の経験された忌々しい事件から
すでに千と三百年以上もの時が経っております。

もうそろそろ、過ぎたこととしても

よいではありませんか。前を向きましょう。

月日が経とうとも、
現代の世でも花を手向ける心優しき住民に
あなた方の主人の心は救われていらっしゃる。」

守君大石「いいえ。この心。決して忘れるわけにはいきませぬ。
我々は配流に留まり、何とか命だけは助けられた身。
世を変えるため、命を賭した皇子さま。
残されたものは旅を続け、
御霊を慰める使命があるのです。」

従人「皇子ともあろうお方の最期の食事が、
椎の葉に盛られた粗末な飯とは。悔いております。
悔やんでも悔やみきれませぬ。私たちがいながら。」

家になればこうに盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

一行「旅の方。どうかどうか皇子最期の地へ
お連れただけませぬか。皇子は恐らく今もそこに
心縛られたまま。我々がお守りしなければ。」

憶良氏「ここで出会ったのも何かのご縁。
先生よろしいですか。一緒にお連れしましょうよ」

家持氏「憶良さん。正気の沙汰ではありませんよ。
帰れる保証はありません。」

憶良氏「放ってはおけません。さあ、いきましょう。皆々様。」

憶良氏を心配する家持氏。とうとう覚悟を決めた様子。
後ろ振り返り、松の枝を結び合わせた。

憶良氏「家持先生、何をしておられるのですか。
早く参りましょう。」

家持氏「無事を祈って、せめてもの呪い^{まじな}ですよ。
こうして有間皇子の気持ちがわかる時が来るとは・・・」
磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む

家持氏・憶良氏は一行と共に、藤代の坂を登ってゆく。
真っ暗な山中、不安と恐怖が募る。

もうここまでか・・・と思ったその時
前方にあたたかな光を放つ不思議な人影を見つけた。
従人たちが口々に叫び始める。「皇子さま！！」
そこに光るは、
在りし日の、誇り高き若き姿の有間皇子の姿であった。

守君大石「皇子さま。お会いしとうございました。
このような寂しいところへ、置き去りに。
私たちがいながらにして、
なんとお詫びを申し上げれば」
磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ

皇子「もうよい、もうよい。楽になりなさい。
心配せずとも、ここにあの頃のわしはもうおらぬ。
赤兄の罠にはまったは、
私が若かったこと。幼かったこと。ただそれだけじゃ。
権力の世では、どうにもならぬこともある。
人の数だけ正義があるのであろう。」

もう狂人のふりを続けなくともよいのじゃ。
今の私は実に安らか。
誰も恨んではおらぬ、憎んでもおらぬ。
今はただただ静かにおりたい。それだけじゃ。
ただ、皆には本当に申し訳ないことをした。
悔やんでも悔やみきれぬ。詫びを入れるるはわしの方じゃ」

従人「何を仰います。あなた様を守りきれぬこと。
ただただ無念の日々でございました。」

皇子「守りきれぬは、私の方。
己の誇りなど、かなぐり捨て
中大兄に許しを乞えばよかったのじゃ。
そうすれば、そなたたちを救うことができたであろうに。
それが真の主君というもの。」

守君 「そのお言葉だけで、我々は充分でございます。
坂合部 こうしてまたお逢いすることができたのですから」

そこに、塩屋連・新田部、両氏の姿が現れた。
皇子に同じく、悲惨な結末を迎えた両氏だったが
穏やかな佇まいをしている。
涙ながらに、讃えあう人々。
木枯らしが吹き荒れ、周りの木々がいっせいにざわめく。

その瞬間。
あたりは一面の桜景色に変わった。
花吹雪が彼らを包み込み、光り輝かせた。

ほっと顔を見合わせる家持氏と憶良氏。

・・・・・・・・・・気がつく、家持・憶良両氏の姿は
藤白神社の境内・・・・・・・・・・

憶良氏「先生・・。家持先生。お起きになりましたか？」

家持氏「ああ、憶良さん。あれ？私、眠っていましたか。」

憶良氏「ええ。お昼のお弁当を召し上がったら
気持ちよさそうに。お仕事お忙しいのでしょう。
ゆっくりされましたか。」

家持氏「それが、ゆっくりできたような、できなかったような。
とにかく不思議な夢をみておりました。」

憶良氏「そうでしたか。それは興味深い。
帰り道に聞かせていただきますでしょうか。」

藤白の坂を降りる二人を、桜吹雪が包みます。
家持氏が、ふと道端に目をやると、そこには松の木が。
その枝は、しっかりと結ばれていました。
先ほどのことは夢だったのか、それとも・・・・・・・・・・。

家持氏「皇子は一体どんな想いでこの坂道を歩いて
松の枝を結んだのでしょうか。」

憶良氏「そうですねえ。

しっかり結ばれた松の枝だけは、その思いも
事の真実もお見通しなのでしょうけども。
有間皇子。今頃は、あの空の鳥のように
自由に羽ばたいているとよろしいですね。」

天翔りあり通ひつつ見らめども人こそ知らね

松は知るらん

～あとかき～

旅の最初の見学地、万葉風土記の丘にて
案内ボランティアの方のお話がありました。

「縄文時代の人骨には、人々が争ったり殺し合いをしたような傷あとが、ほとんど見られないそうですよ。
ところが、弥生時代になると、それが見受けられるという。
米作りが始まり、豊かな時代がせつかく来たのに
奪い合い憎みあいが始まるのは、何とも哀しい性ですね。
幸せって何なのか、考えてしまいますねえ。」

今回の旅の伏線のような、お言葉からヒントをいただき、
創作能を作るきっかけになりました。

権威も権力も振りかざす必要ないよね。といった
健やかな面持ちの皆さまと、ご一緒させていただくたびに
心洗われた気持ちで帰途につき、明日も頑張ろう！と思えます。
また皆さまと、楽しいお出かけができますよう。

『関連する歌』

卷二 141 有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首
磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む
岩代の浜松の枝を引き結んで、幸いにも無事でいましたら
また帰りにみましよう。

卷二 142

家があれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る
家にいたのなら、食器に盛って食べる飯なのに
草を枕とする旅の身なので、椎の葉に盛ることだ。

卷二 144 長忌寸意吉麿の結び松を見て哀しび咽^{むせ}べる歌
磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ
岩代の野の中に立つ結び松よ、いつまでも枝を解かぬ様に
私の心も解けず。昔のことが思われてならぬ。

卷二 145 山上憶良の追ひて和へたる歌一首

天翔りあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらん
翼をつけた御霊は、鳥のように行き来をしながら見て
いらっしゃるのですが、人はそのことには気づきません。
でも、松だけは知っているのでしょうか。

